

「切って」「貼って」「包む」自慢の加工技術 モノ作りで産業界の 理想絵図の完成を目指す

ナショナルマリン
プラスチック

ナショナルマリンプラスチック(品川区南大井、時田周明社長、03・3763・4601)は、多彩な特性素材の中から選定したプラスチックシートを自在にカットして、保有技術である高周波ウエルダー・熱風溶着・縫製の3つの加工方式で立体機密加工製品を生産している。今年で創立65周年を迎える同社は、ISO9001やJIS認証のライセンスを持つ福島工場で、「切って」「貼って」「包む」加工技術の向上に日々努めている。この工場で作られたフレコン(ターポリン素材の袋状の物流容器)は現在福島県を中心に、放射能に汚染された土を除去する際に使用されており、海外の製品より耐久性に優れていると注目されている。

昭和30年代までの同社の主力製品は、船で重油を運搬するためのタンクであった。職人技を駆使して、船の形に合ったタンクが作れることを強みとしていた。その後、排他的経済水域200海里の設定により、このタンクの需要は減少したが、その加工ノウハウは継承され、現在では工業・防災・農

業等の各市場でそれぞれの仕様に合わせた液体容器に活かされている。その他にも輸送と保管に適し、防水性・気密性に優れた食品衛生法に適合している「シャトルエース」というフレコンも製造している。また、災害対策用の貯水タンクやウオーターフェンス、さらにはプールやトランポリンといった保育用品まで手掛けている。現在は、保育用品からの応用で、介護用品は作れないか日々模索中だ。時田社長は「こんなに幅広い市場に対応した製品を取扱っている企業は他にない」と自信を見せる。また、「お客様の要望を形にする、お客様本位のモノ作りを通して『そこまでやるか』と驚いていただけるようなレベルのモノ作りがしたい。そしてモノ作りで産業界の理想絵図のジグソーパズルを完成させた」と夢を語ってくれた。空いている空間をどんなピースでどのような埋めるかを考えれば、まだまだ需要はあると言う。

東京オリンピックの開催やリアアモーターカーの開通等、社会が変化していく中で、同社の製品がさらに多くの市場で活躍する日が必ず訪れるだろう。



「社会にモノ作りで貢献したい」と時田社長



災害対策用貯水タンク「貯タンくん」